

クラシック音楽の演奏に関するルーブリックの作成

関東学院大学
杉原亨

近年、教育現場においてルーブリックの導入と活用に関して活発に議論がなされている。ルーブリックとは、学習者のパフォーマンスの質を評価するために用いられる評価基準のことである(松下,2016)。このような状況を踏まえて、本研究ではクラシック音楽の演奏に関するルーブリックの作成及び実証を行った。

評価対象者を中学生から高校生の演奏者と想定して、筆者(枠組み)とクラシック音楽講師歴20年の指導者(詳細項目)で作成した。評価項目は「楽譜の読解力」「楽譜を再現する演奏(技術)力」「演奏の表現力及び個性」で、3段階評価とした。

表1.ルーブリック(クラシック音楽の演奏)

	A:素晴らしい	B:普通	C:努力が必要
楽譜の読解力	・楽譜をかなり理解できている (1.音名が読める・2.リズムを取ることができる・3.音楽用語を理解できる・4.音程が頭の中で再現できる・5.楽譜を演奏するために必要な技術を適切に思考できる・6.課題曲に関する知識を持っている)	・いくつかの理解できていないところもあるが、概ね楽譜を理解できている	・楽譜を理解できていない
楽譜を再現する演奏(技術)力	・読解した内容をすべてを演奏で再現できる・持っている知識を実際に使える (1.音名を正しく演奏できる・2.リズムを取ることができる・3.音楽用語を理解でき演奏できる・4.音程が頭の中で再現したものと一致した演奏ができる・5.楽譜を演奏するために必要な技術を適切に実行できる・6.課題曲に関する知識を演奏に反映できる)	・いくつかのミスはあるが概ね譜面通り演奏できる	・譜面通り演奏できていない(技術不足)
演奏の表現力及び個性	・読解した内容以上のことを楽譜から想像し、演奏できる (たとえば、歌詞が悲しい内容だったらそのような音を出した、など)	・想像できる箇所とできない箇所が混在している。	・書かれていること以外はまったく想像できない

次に、2人の生徒(高校2年生)に対して、ルーブリックを活用した、指導者による演奏の評価と、生徒自身の自己評価を実施することで差分を検証した(教材はドボルザーク作曲・交響曲第9番「新世界より」)。

その結果、両者とも全般的に生徒自身の評価は指導者より低かった。生徒は理想の演奏と実演とのギャップにより自らを低く評価している一方、指導者は力量を冷静に評価していることが一因として考えられる。